



巻頭言

情報処理大衆化時代

渡部 和*

“情報処理学”あるいは“情報処理工学”と言うものがあるとすれば、それは“情報処理産業”の発展を支える基礎学術でなければならない。情報処理産業は極めて若くせいぜい十数年の歴史しかない産業であるが、関連する産業分野がこれ程広いものも他に類を見ないであろう。それに伴って“情報処理学”が分担している、あるいはすべき領域も他の既成の学術分野とは比較にならない程多様な範疇に広がっている。しかしこれ程の広い領域にわたって一つの体系的学術分野を形成する事は容易な事ではなく尚多くの歳月を必要とする。またそれ故コンピュータサイエンスと言うような概念的呼称が使われたのであろう。

情報処理学会にはこのような広い情報処理全般にわたる研究交流促進を図らねばならない使命があるが、これまた仲々大変な事である。現在のところ情報処理の中心に存在するコンピュータについて、そのハードウェア、ソフトウェアそしてその応用について研究し成果を積み重ねて行く事が重要で本学会の現状でもある。最近になって情報処理産業自身もようやく成長発展の青年期から成熟の壮年期に入りつつあり、今までのような一本調子の縦方向への拡大ばかりでなく、より広範囲な横方向へのひろがりをみせつつある。すなわちコンピュータの応用が主として社会の先端分野に適用されて来た現状からもっと社会大衆に密着した底辺分野にひろがりはじめた。この傾向は LSI、超 LSI 技術の驚くべき進歩や通信ネットワーク技術の着実な進歩と蓄積に支えられて小型／超小型コンピュータ、インテリジェント端末などが爆発的に普及しはじめた事からも窺う事が出来る。事実昨年 6 月末現在で小型・超小型機の稼働台数は 2 万 8 千台に達し全コンピュータ設置台数の 78% (超小型機で 51%) にもなり、特にオフィスコンピュータの伸び率には目覚ましいものがある。この傾向の特色は第 1 に情報処理が一部のエリートのものから一般大衆のものへと浸透し、今まで

情報処理技術の恩恵に直接関係なかった社会層にも小型安価しかも高度の処理能力をもつコンピュータや端末が使われるようになった事である。そして第 2 に中／大型コンピュータと端末、小型コンピュータを相互に結びつけ統合システムを形成する所謂分散処理方式が始まった事である。

これは情報処理そのものの社会化大衆化現象とみる事が出来る。どの産業分野でもこのような大衆化現象が本格的に始まった時期が真の発展段階に達したと言えよう。それは近年の電話、家電、自動車などの産業を想起すれば了解されるところである。その意味から情報処理産業もようやく本当の意味での発展段階に突入し始めたところである。

このように大衆化しつつある情報処理産業の基盤を受け持つべき情報処理 (工) 学も従来の延長線上をたどるだけではなく新しい展開を果さねばならない時に至ったのではあるまいか。学術の進歩は社会のニーズの本質を見極めそれを先取りするところから生れる。今こそ情報処理産業が直面しているニーズを先取りしてより広い基盤を受け持つ情報処理学へと発展して行かねばならない。そこで特に重要となって来るのは、今までコンピュータに全くなじみがなかった一般職業人が自由にコンピュータを利用できるような手段を提供する事である。使い易くするにはかえって高度な学問と技術を必要とするもので、複雑な使い方を強いられるようではその分野の技術が未熟である証拠であろう。

情報処理大衆化時代において本学会に期待される方向は、第 1 により人間的な使い易さを使用するための高度な技術の追求 (人間とのインタフェース言語処理、図形認識処理、高水準端末機能など) そして第 2 により広い領域への拡大 (実務分野での改善合理化システム、通信との一体化、その他社会各層への学際的ひろがり) であろう。本学会の責任はいよいよ大きいと言わねばならない。(昭和 52 年 4 月 13 日)

* 本会理事 日本電気(株)情報処理小型システム事業部長